

## 現状の課題

- ・英語は必要と感じる児童がほとんどで、意欲的な児童もいる一方で、話すことに抵抗感を持つ児童もいる。
- ・中学校へ円滑につながる小学校4年間の指導目標の系統性が学年間で意識されていない。
- ・教科化に向けて、評価に対する不安がある。

3人組による交流グループで相互評価。……※2  
会話2名+アドバイザー1名。



## 具体の取組の内容

### 取組(1) 実態に合った目的のある単元づくり

- ① Small Talk等による単元ゴールの設定  
(他教科・行事・地域素材・言語材料から)
- ② 学習の見通し・計画づくり ……※1  
身に付けたい力・ゴールに必要な力を児童との話合いで引き出し、共有化
- ③ 基本表現に慣れ親しむ活動
- ④ 言語活動の場の設定の工夫  
(自分の思いや考えの表現)  
中間評価の持ち方

### 実践例) 主体的・能動的な聞き手を育てるための構造的板書



### 取組(2) 指導と評価に役立つ

#### CAN-DOカードの活用

- ① 単元CAN-DOカード  
1単元1枚。(表)自己評価  
(裏)学び・気づきの記録用
- ② 年間学習計画CAN-DOカード  
1年間の学習内容  
できるようになることの共有  
単元ごとの振り返り用
- ③ 板書による言語活動の振り返り  
中間評価(Share time)での  
相互評価の共有 ……※2  
できるようになったことの可視化

単元導入時に話し合った「身に付けたい力」を掲示…※1

使えるような既習表現の確認

会話を続ける4つのポイント

中間評価で出された表現の良さを類型化してマグネットで貼る。学級全体の活用量を黒板上で可視化 ……※2

本時の流れ

## 成果①

- 他教科や指導時期に合った行事と関連付けながら単元のゴールを設定することで、より児童に興味・関心を持たせた学習を展開することができた。
- 単元の導入時に、身に付けたい力やどんな力が必要かを話し合う時間を設け、学習の見通しを持たせた。これにより、教師からの一方的な指導ではなく、活動の目的が明確になり、児童自身が学習に対する必要感を持つようになった。また、話合いの内容を掲示したことで意識化を図ることができた。
- 即興的なやりとりでは、よい聞き手を育てることが大切である。相手に配慮し「能動的に聞く力」を育てる時間を意図的に位置けた。その結果、話し手に対し、既習事項を生かして聞き返したり、話題を広げたりする姿が見られるようになってきた。

## 成果②

- 単元振り返りカードでは、身に付けたい力の基準表(表面)に自己の変化を、自由記述(裏面)には、授業での気づきや難しかった点、できるようになった喜び、友達の良さなどの記録がみられた。教師にとっても指導を振り返る材料となり、授業づくりに生かすことができた。
- 4月の授業開きで使用したカードは、各単元の学習内容のオリエンテーションや、毎学期の振り返りの場面でも活用することができた。各学年の年間CAN-DOカードとしても活用できた。
- 言語活動では形態や編成人数を工夫し、相互に評価する場面を取り入れた。教師1人では見取り切れない場面でも、友達同士での教え合い・認め合いが見られるようになった。
- 中間評価で児童から紹介された会話表現の個数を黒板にマグネットで示すことにより、その活用量や表現の深まりを可視化することができた。

## 今後の課題・方向性

- 言語活動で児童の思いや考えを英語で表現させる際に、児童の語彙力の限界を感じ、安易に教えてしまいがちになる。指導に関わる全教師が、①簡単な言葉で言い換えられないか、②既習表現から使えるような表現はないか、と自分で考えさせる段階を持つことが、中学・高校での即興的な表現力につながることを、どの学年の指導者も共通して意識していく。
- 自校化した年間指導計画の作成が急務である。新教科書に基づき、2年間の実践をもとに、指導時期、行事・他教科との関連・地域性を生かし、児童が興味を持って学習できるように、学校の実態に合った単元づくりを見直す必要がある。加筆・修正しながら、新教科書版児童用単元CAN-DOカードを作成する。
- 中学校に円滑につながる小学校版CAN-DOと、各学年の単元評価計画を連動して整備し、どの学年でどんな力をつけていくのかを校内で明確に共有しながら評価方法を模索する。公開研究会等で他校種からも意見を頂き、改善を図る。